

メコン—人びとの物語— 第3回

フクロウとシカ ラオスのカム民族の民話

聞き取り・構成／東 智美（メコン・ウォッチ）

ラオス北部ウドムサイ県パクベン郡は人口の大部分をカム民族が占める。カム民族は、現在のラオスの地に最も古くから住んでいる先住民族だと言われる。カムの人々の一般的な生活は、焼畑での稲作を中心とする農業を基盤とし、森や川での狩猟や採集によって支えられている。パクベン郡のチョムレンノイ村に暮らすトープばあさんは、村一番の昔話の語り手だ。年を取って、もう焼畑には行けなくなったトープばあさんは、小さな子どもたちの面倒を見たり、ニワトリに餌をやったり、近くの森に野菜を採りに行ったりして暮らしている。トープばあさんが語る昔話には、いつもさまざまな動物や植物が登場する。今回紹介する「フクロウとシカ（※）」の物語にも、フクロウ、シカ、ゾウ、ヘビ、コウモリといった野生動物、ニワトリやブタといった家畜、人間、さらには竜までが登場する。森に生えている野生バナナが出てくれば、人間が焼畑に植えたのであろうカボチャも現れる。カムの民話には、人間の暮らしの営みと森や川が育む自然が深くつながっているカムの人々を取り巻く世界が垣間見える。

ある日、フクロウがシカを魚獲りに誘いました。

連れ立って川にやってくると、フクロウは小さな川、シカは大きな川で、ザルを使ってそれぞれ魚を獲ることにしました。

シカは魚やサワガニなど、たくさんの獲物を捕まえました。一方のフクロウのザルには何もかかりません。腹が減ったフクロウはシカに向かって言いました。

「おい、シカ。川の上流に行けば、もっとたくさん魚が捕れるよ」

「本当かい？ それならちょっくら行ってくるよ」

シカは獲物を残し、川の上流に向かいました。

シカの姿が見えなくなったのを見届けると、フクロウはシカが集めた魚を食べてしまいました。

シカが元の場所に戻ってみると、せっかく集めた獲物が見当たりません。残っていたのはフクロウが食べ残したサワガニだけでした。

だまされたと感じたシカは、腹立ち紛れに暴れ回りました。すると、植わっていたカボチャのつるにうっかり足を引っ掛け、カボチャが転がっていきました。

カボチャが転がった先では、ちょうどおばあさんが、火をおこして、お湯を沸かしているところでした。

カボチャに当たった鍋はひっくり返り、煮えたぎったお湯がおばあさんの足にかかりました。

熱湯を浴びて、気が動転したおばあさんは、ドラムを打ち鳴らしました。

ドラムの音に驚いたニワトリが、叫び声をあげて走り回り、立てかけてあった棒（焼畑のもみまきの際、土に穴を開けるために使うもの）を倒してしまいました。



魚とりに出かける子どもたち

倒れた棒は、ヘビにぶつかりました。

驚いたヘビは、一目散に走り出しました。慌てていたヘビは、うっかりアリ塚を踏みつぶしてしまいました。

塚を壊されたアリは、一斉に逃げ出し、近くにいたブタの口に噛み付きました。

アリに噛み付かれたブタは、アリを振り払おうと、バナナの木に口をこすりつけました。

ブタがあまりに強くこすりつけたので、バナナの木は倒れてしまいました。

驚いたのは、バナナの木で眠っていたコウモリです。慌てて飛び出したコウモリは、ゾウの耳に飛び込みました。

今度はゾウがびっくりして、転がっていた木の枝を蹴飛ばしました。

転がり落ちた木の枝は、川を泳いでいた竜の子どもの目に突き刺さりました。

目がつぶれて泣き叫ぶ子どもの声を聞いた竜のお母さんが、慌てて駆けつけました。

「まあ、一体どうしたっていうの？」

「木の枝が転がってきて、目に刺さったんだ」と竜の子ども。

「木の枝や、なぜ私のかわいい息子の目を突き刺したりしたんだい？」

「だって、ゾウに踏みつけられたから、私は転がってしまったんだよ」

「ゾウや、なぜ木の枝を踏みつけたんだい？」

「だって、コウモリがいきなり耳の中に飛び込んできたから、驚いたのさ」

「コウモリや、なぜゾウの耳に飛び込んだりしたんだい？」



焼畑に植えられたカボチャ

「だって、止まっていたバナナの木が倒れたからだよ」

「バナナの木や、なぜ倒れたんだい？」

「だって、ブタが口をこすりつけてきたからさ」

「ブタや、なぜバナナの木に口をこすりつけたんだい？」

「だって、アリが口に噛み付いてきたからさ」

「アリや、なぜブタに噛み付いたんだい？」

「だって、ヘビが塚を壊したからだよ」

「ヘビや、なぜアリ塚を壊したりしたんだい？」

「だって、棒がいきなり倒れてきたからさ」

「棒や、なぜヘビに倒れかかったんだい？」

「だって、ニワトリがぶつかってきたからさ」

「ニワトリや、なぜ棒にぶつかったんだい？」

「だって、ばあさんが急にドラムを鳴らしたりしたからさ」

「ばあさんや、どうしてドラムを鳴らしたんだい？」

「だって、鍋がひっくり返って、熱湯が足にかかったから、驚いてしまったんだよ」

「鍋や、どうしてひっくり返ったんだい？」

「だって、カボチャが転がってきたからさ」

「カボチャや、どうしてお前は転がったんだい？」

「だって、シカが蔓を引き抜いたからさ」

「シカや、どうしてカボチャの蔓を引き抜いたんだい？」

「だって、フクロウが私の獲物を横取りしたから、腹が立ったのさ」

とうとう竜のお母さんは、フクロウのところまでやってきました。

「フクロウや、どうしてシカの獲物を横取りしたんだい？」



村で家畜として飼われているブタ・ニワトリ・イヌ

フクロウには上手い言い訳が見つかりません。答えに詰まったフクロウは大きな目をきよろきよろ動きました。

「悪いのはお前だね。お前のせいで、私の息子の眼がつぶれてしまったよ。代わりにのお前の目をいただくからね」

竜はフクロウの目玉を抜き取り、息子に付けました。代わりに、夜だけは目が見えるよう、サレーンという果物の種をフクロウの目に入れてやりました。

こうして、ずるがしこいフクロウは、昼間は目が見えなくなってしまったんだとさ。

■注

※物語に登場するシカは、カム語で「プアイ」、ラオス語で「ファーン」と呼ばれる小型のシカ。